

【発行者】新潟農業普及指導センター
 新潟庁舎：0250-24-9624、津川分室：0254-92-0965

刈り遅れ注意！早生・中生品種は高温登熟となっています 1等級比率90%に向け、適期に収穫を！

ここがポイント！！

- 1 出穂期後25日までは飽水管理を徹底する。
- 2 早生・中生品種は収穫適期が早まるため、刈遅れないように注意する。
- 3 籾の黄化率を確認し、適期(黄化率85~90%)収穫と適正な乾燥・調製を行う。
- 4 収穫後は、稲わら・籾殻を10月中旬までに本田にすき込む。

1 登熟期間の水管理

(1) 出穂期後25日までは飽水管理^{*}を継続する。

ア 早期落水は下位葉の枯れ上がりや倒伏を助長し、登熟不良による品質低下を招く(図1)。

イ 成熟期が遅い品種は、最終通水日にしっかり湛水する。

(2) 異常高温やフェーン現象が予想される場合は、あらかじめ湛水する(ただし、長期間の湛水状態は厳禁！)。

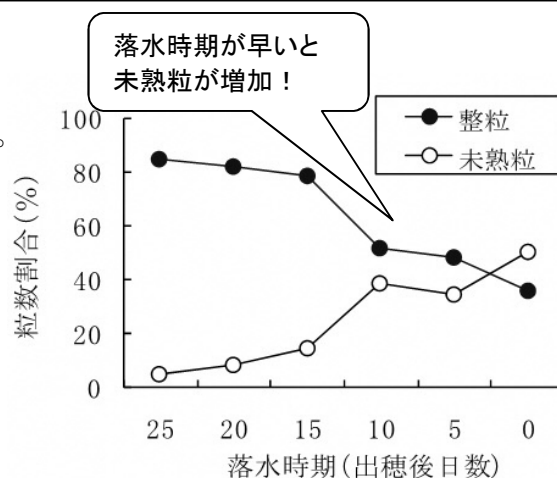


図1 落水時期と米品質

^{*}飽水管理：水尻は止水し、自然減水で田面の水が無くなり、溝や足跡の底に水がたまっている箇所が散見される状態になったら、かん水する。

2 主要品種の出穂期と収穫適期のめやす(8月18日現在)

表1 主要品種の出穂期と収穫適期のめやす

品種	出穂期 ^{*1}	収穫適期の 出穂後積算気温	収穫適期 ^{*3}
新潟次郎(飼料用)	7月19日	1,000℃ ^{*2}	8月25日
五百万石	7月20日		8月23日
早生 わたぼうし	7月23日	925℃	8月26日
ゆきん子舞	7月24日	(高温年のめやす)	8月27日
こしいぶき	7月25日		8月28日
こがねもち	7月30日	950℃	9月4日
中生 コシヒカリ(5/5植)	8月4日	(高温年のめやす)	9月10日
コシヒカリ(5/10植)	8月5日		9月11日
晩生 新之助	8月10日	1,050~1,100℃	9月23~24日

^{*}1 早生・中生は5月5日植え、新之助は5月中旬植えを想定。

^{*}2 検査基準が他品種と異なるため、通常どおりの出穂後積算気温で収穫する。

^{*}3 今後の気象により変動する可能性あり。

- (1) 早生・中生品種では高温登熟となっているため、出穂後の積算気温で、早生品種は925℃、中生品種は950℃をめやすに刈り取りを計画する（表1）。
- (2) 晩生品種の刈り取り適期のめやすについては今後の情報に注意し、遅れずに刈り取る（9月上旬発行予定の稲作速報 No. 9 で情報記載）。

3 収穫の留意点

- (1) 出穂後積算気温を参考に収穫日を予測し刈取計画を立てる（表1を参照）。
 - ア 高温登熟年は、刈り遅れで基部未熟粒や胴割粒が増加しやすくなるため、出穂後積算気温で平温年より50℃程度（2日程度）早めに刈り取る計画とする。
- (2) 実際の収穫は、黄化粃の割合が85～90%になった頃とする（図2を参照）。
 - ア 早刈りは青米・未熟粒の混入増加や収量低下の原因となる。
 - イ 刈遅れは胴割粒・着色粒等の増加による品質低下を招く。
- (3) 墨黒穂病や稲こうじ病が発生したほ場では、稲体が乾いた状態で収穫し、無発病ほ場とは別に乾燥・調製する。

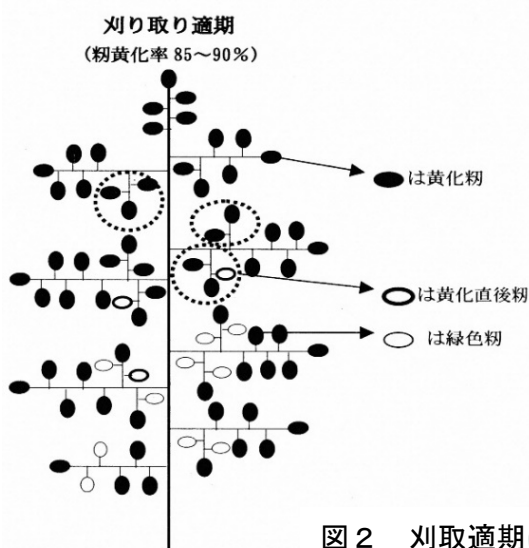


図2 刈取適期における穂の模型

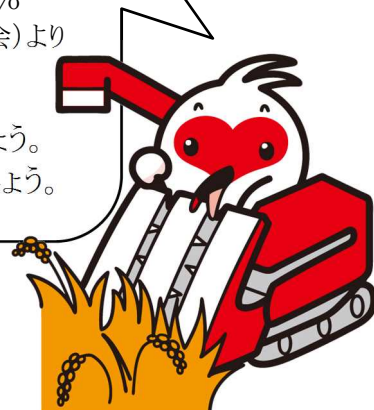
【黄化粃率の調査方法】

- ① 1次枝梗が9本程度の平均的な穂を選ぶ。
- ② 上位3～4本目の1次枝梗に付いている粃が黄化しているか確認する。
- ③ 上記について、10本程度の穂で確認し、8本以上該当したら刈取適期とする。

【収穫作業時の事故対策】

- 移動・走行中(特に、バック時に転落・転倒)による事故 : 34.7%
 - つまり除去(エンジンを止めずに)による事故 : 20.4%
- 農作業事故の対面調査(一般社団法人・日本農村医学会)より

周囲に人がいないことを確認し、後退時は後方を十分確認しましょう。
回転部や刃物が多いため、詰まったときは必ずエンジンを切りましょう。



4 適正な乾燥

- (1) 食味低下防止のため、張り込み時の籾水分に応じた送風温度を設定する（表2）。
- (2) 胴割粒の増加防止のため、毎時乾燥水分が0.8%を超えないよう、ゆっくり乾燥する（立毛胴割の発生が懸念される場合や、収穫時の籾水分が20%以下の場合、毎時0.5%以下とする）。
- (3) 籾水分のばらつきが大きい場合（フェーン現象時の収穫や、倒伏ほ場で大きくなりやすい）は水分18~20%で乾燥を一旦停止し、半日程度貯留して水分ムラを解消した後、再乾燥を行う。
- (4) フェーン現象時に乾燥を行う場合は、日中は常温の通風乾燥とする。加熱乾燥は夜間に行い送風温度を通常より低めにする。
- (5) 仕上げ水分は15%を目標とし、以下の点に留意する。
 - ア 水分が17%以下になったら、手持ちの水分計でこまめに測定する（乾燥機の自動水分計は青米・屑米混入が多いと精度が下がるので注意）。
 - イ 乾燥終了後の水分変化も考慮する。青米・屑米混入が多いと玄米水分が増加する（表3）。
 - ウ 籾水分のばらつきが大きいほ場では、過乾燥や乾燥終了後の玄米水分の戻りが生じやすいので、青米や屑米を除いた整粒の水分を手持ちの水分計で必ず確認する。

表2 張り込み時の籾水分と乾燥温度

張り込み時籾水分	28%以上	24%以上	18%以下
送風温度	40℃以下	50℃以下	昼間は通風循環 水分ムラ解消後の夜間頃から乾燥温度を低めに設定して本格運転

表3 乾燥後の水分変化のめやす（富山農試）

100粒中の青米・屑米粒数	乾燥終了後の水分変化
5粒以下	0.5%乾燥進む
6~11粒	ほとんど変わらない
11粒以上	0.5%水分戻る

5 適正な調製

- (1) 籾すり
 - ア あらかじめ籾すり機のゴムロールの摩耗状態を確認する。脱ぶ率が80~85%になるようゴムロール間隔を調節する（基準0.8~1.2mm）。
 - イ 肌ずれ防止のため、籾温度が常温近くまで下がってから行う。
- (2) 米選
 - ア 1.85mm以上のふるい目を使用し、適正な流量で選別する。
 - イ 未熟粒や被害粒が多い場合は、流量をしばらく屑米除去の精度を上げたり、1.9mmのふるい目や色彩選別機を利用し、整粒歩合を高める。

6 稲わらの秋すき込み

(1) 稲わらの秋すき込みは堆肥施用と同等の「土づくり」効果がある。

(2) 以下の点に注意して、稲わらの秋すき込みを実施する。

注意① 翌年の春にすき込むと、田植え後のワキの発生が増加し、初期生育が抑制される。
⇒稲わらは秋にすき込む。

注意② 秋が深まり気温（≒地温）が低くなると、すき込んだ稲わらは分解しない。
⇒稲わらのすき込みは収穫後できるだけ早く（遅くとも10月中旬までに）行う。

注意③ 稲わらすき込み時に深耕すると、下層の稲わらは分解しない。
⇒耕深は5～10cmの浅うちとし、稲わらと土壌を十分に混和する。

7 ケイ酸供給源としての籾殻の有効利用

(1) 多くの水田土壌でケイ酸が不足しており、ケイ酸質資材の施用が必要。

(2) 籾殻はケイ酸を約20%含む有用なケイ酸質資材。

(3) 玄米収量540kg/10aの水田から得られる籾殻（約130kg/10a）を全てほ場に還元すると、ケイカル80～100kg/10a施用と同等の効果が期待でき、土壌物理性（通気性や透水性）も改善する。

(4) 以下の点に注意して、籾殻を稲わらと一緒に秋にすき込みを行う。

注意① 籾殻を多量に施用すると、翌年、ワキの発生等で稲の生育が抑制される。
⇒施用量は各ほ場から得られた籾殻量を基本とし、均一に散布する。

注意② ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の籾殻や、雑草種子が多量に混入した籾殻は翌年の稲の病気や雑草の発生源となる。
⇒ほ場には施用しない。

8 堆肥や土壌改良資材の積極的な施用

(1) 近年、ケイ酸やリン酸、加里等が減少しているほ場が増加している。

(2) 土壌診断に基づき、不足している成分を補う土壌改良資材を施用する。

(3) 稲わらや堆肥などの有機物の投入は、地力増進や土壌物理性の改善に効果的。

(4) チゼルプラウによる粗起こしは、ほ場の排水性を向上させ、稲わらの分解促進や乾土効果による初期生育の向上、春作業の効率化等が期待できる。



チゼルプラウ

～ 収穫適期に関する情報はHPでも随時掲載予定です～

